ＩＩＡＳ「ゲーテの会」ブックレット
（VOL.01087）

「新しい文明」の萌芽を探る
－日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした「先覚者」の事跡をたどる－

（思想・文学分野）

「伊藤整」の
西欧文学・文化受容の姿勢

公益財団法人国際高等研究所
＜「新たな文明」の萌芽、探求を！＞プロジェクト

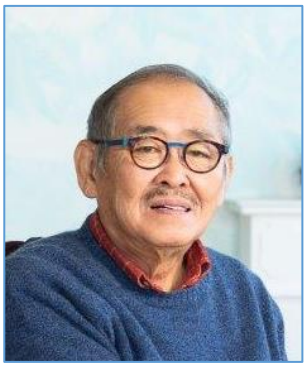
本ブックレットは、2021 年 7 月 20 日開催の第 87 回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。
※本ブックレットの無断転載・複写を禁じます。ただし、個人としてのご利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

「新しい文明」の萌芽を探る
－日本と世界の歴史の転換点で、転轍機を動かした「先覚者」の事跡をたどる－

「伊藤整」の
西欧文学「文化」受容の姿勢

伊藤整は昭和初期『新心理主義文学』を日本にいち早く紹介し、みずからも実験的作品を書き、川端康成から評価される。だが、その後自然主義的傾向の作品に後退する。戦後は「伊藤整理論」を確立して、戦前から批評の対象としてきた「私小説」を総括する。小説では『鳴海仙吉』、評論では同時進行で『小説の方法』を発表する。彼はつねに「生命と秩序」の相克に目を向けて、そのもとに「エゴ」の問題を見据え、さらに作家や画家などの芸術家が「愛情乞食」だと明言するにいたる。そこに及ぶまでには、北海道出身の彼が自分をどう位置づけて、西欧文学の移入に努めてきたか。今回の講演では、以上の問題を整理しながら、多方面で第一級の仕事を遺し、1970 年度ノーベル文学賞の候補に挙がっていた伊藤整の文学を総論的に捉えてみたい。

澤井 繁男（Shigeo SAWAI）



作家、元 関西大学文学部教授

1954 年、札幌市生まれ。札幌南高等学校時代、有島青少年文芸賞受賞。上京して『第 19 次新思潮同人』となる（東京外国語大学時代）。小説「雪道」により、『200 号記念北方文芸賞』受賞（選考委員；野間宏、八木義徳、吉行淳之介、井上光晴の４氏；京都大学大学院時代）。東京外国語大学論文博士（学術）。元 関西大学文学部教授（イタリアルネサンス文学文化専攻）。『三田文学』『新潮』『文學界』等に作品を発表し、現在にいたる。日本文芸家協会員。

目次

はじめに

Ⅰ　北海道生まれ、ということ

Ⅱ　北海道文学の系譜と伊藤整の位置
（１）　２つの系譜
　①　社会派と抒情派
　②　宗教派とロシア派
（２）　伊藤整の位置
　①　４つの系譜に属さない伊藤整
　②　「日本文学」と異なる北海道文学
　③　伊藤整の作品

Ⅲ　「私小説」への問いかけ
（１）　身辺のことを記述する作品
　①　生活報告的性格
　②　文壇ギルド内のみで成り立つ
（２）　西欧の近代社会で生まれる立方体の作品との差異
（３）「私小説」を書かなかった森鴎外と夏目漱石

Ⅳ　「エゴ」の問題
（１）　生命と秩序
（２）　愛情への飢え

Ⅴ　西欧文学文化の受容
（１）　江戸時代～幕末・明治以後
（２）　伊藤整の視座
（３）「新心理主義文学」の紹介
　①　ドストエフスキーとスタンダール
　②　信仰の信念を失った世紀

Ⅵ　「性・愛」の表現の変化
（１）『鳴海仙吉』と『変容』における表現
（２）　２作品における表現の変化

質疑応答

2021 年 7 月 20 日開催
第 87 回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」
テーマ：「伊藤整」の西欧文学・文化受容の姿勢
講演者：澤井 繁男（作家、元 関西大学文学部教授）

（文中敬称略）

はじめに

本日は六つの章立てでお話ししたい。

第 1 章は、伊藤整は「北海道生まれ、ということ」である。私も北海道生まれだが、後ほど説明するように、北海道には、一つの文化、文学的な土地、風土が存在している。それをアイヌ民族の話と共に紹介する。

第 2 章は「北海道文学の系譜と伊藤整の位置」で、北海道文学を論ずる時には二つの系譜があり、それらも二つの系列にわかれるが、伊藤整はどちらにも属さない。それを考えてみたいと思う。

第 3 章は「『私小説』への問いかけ」で、伊藤整というひとは作家としても、評論家としても、終生「私小説」にこだわり、自分の作品にこれをどう活かし、どうこれを乗り越えるかということを常に問いかけながら作品を書いてきた。したがって、「私小説」への問いかけは非常に大切な問題として第 3 章に挙げている。

第 4 章は「『エゴ』の問題」である。「エゴ」とはエゴイズム＝自我である。この「エゴ」の問題は、伊藤整のみならず、文学のテーマになる。例えば、夏目漱石もこの「エゴ」の問題を書いた作家だった。

第 5 章は「西欧文学文化の受容」である。これは今回のテーマで、伊藤整が西欧文学文化の需要をどう見ていたかという客観的な立場について考えるが、そこに伊藤整自身が「本当は俺はどう思っていたのだろうか」ということを交えて紹介する。

最後の第 6 章は「『性・愛』の表現の変化」である。伊藤整は D.H.ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』という作品を翻訳し、猥褻文書販売罪で訴えられるが、その時に「性と愛」の問題を考え、その表現についていろいろと悩む。今回は戦後、伊藤整が 40 代の半ばに書いた『鳴海仙吉』と 60 歳過ぎて書いた晩年の傑作『変容』から「愛と性」の表現を引用し、両者を比べて伊藤整の文学の移り変わりを見ていきたい。

Ⅰ　北海道生まれ、ということ

北海道では本州のことを「内地」と呼び、伊藤整はその立場から北海道を「植民地」と呼んだ。例えば、伊藤整が傾倒し、翻訳した『ユリシーズ』の作者であるジェイムズ・ジョイスは、グレイトブリテン島の隣のアイルランドの出身だったので、伊藤整はグレイトブリテン島を「本土」、アイルランドを「植民地」と見なし、敬愛するジェイムズ・ジョイスを「植

民地」出身の作家と捉えるとともに、北海道生まれの自分も「植民地」の生まれと位置づけてジョイスと重ね合わせている。

また、イエーツという詩人もアイルランド出身なので、英語が堪能だった伊藤整は若い頃にイエーツの詩をたくさん翻訳している。これは新潮社版『伊藤整 全集』全24巻の中にあるが、かなり前の全集なので図書館等で読んでもらえればと思う。

伊藤整(1905－1969年)
朝日新聞社蔵, Public domain, via Wikimedia Commons

さて、この北海道生まれということについて、私もそうだが、大切なのは、北海道に最初に入った屯田兵等、そういうひとたちは、「内地」を故郷と思っていたということで、それに対して、その息子・娘の世代は北海道を故郷と考える。伊藤整はその後くらいのひとなので、自分の故郷は北海道と考えている。ただし「植民地」と位置づけており、幸か不幸かわからないが、そういう発想が伊藤整の文学の基盤にある。

Ⅱ　北海道文学の系譜と伊藤整の位置

（1）２つの系譜

①　社会派と抒情派

北海道文学には二つの系譜が２通りあるが、一つは社会派と抒情派に分けられる。

社会派は、定番的に有島武郎 － 小林多喜二 － 島木健作 － 本庄陸男 － 亀井勝一郎となる。亀井勝一郎は最初、左翼系の評論家だったが、その後、日本浪漫派に替わり、その時に転向する。さらに、もう一人挙げるとすれば、『火山灰地』を書いた久保栄がいる。このひとは重要な戯曲作家だが、首吊り自殺をしてしまう。

もう一つは抒情派で、国木田独歩 － 石川啄木 － 遠藤勝一となる。遠藤勝一はあまり知られていないと思うが、このひとは啄木に憧れて、伊藤整に影響を与えた『林檎の花』という作品を書いたひとである。伊藤整の文学碑が小樽の塩谷に建った際は、遠藤氏も除幕式に出席している。

②　宗教派とロシア派

もう一つの系譜は政治的な色合いが強いが、宗教的なものを重んじた派で、宗教派（プロテスタント）が有島武郎 － 島木健作となる。北海道は、北大のクラーク先生でも有名だが、プロテスタントが布教に来ている。

有島武郎はアメリカに留学し、帰国後、白樺派の最年長者となる。島木健作は正義感溢れる作家で、『癩』という作品でデビューし、『赤蛙』という非常に優れた短編を書いた後、1945年８月15日の２日後、川端康成や小林秀雄に看取られながら結核で亡くなっている。このひとは途中で転向した国策作家で『生活の探究』や『第一義の道』等を残しているが、今読

まれても非常に良い作家だと思う。しかし、この真面目さ故に吉行淳之介に嫌われたという話もある。

もう一つはロシア派（コミュニズム）で、社会主義である。これは小林多喜二 － 島木健作－ 八木義徳の系譜となる。島木健作のプロテスタント的な正義を抱く気持ちがこのコミュニズムに通じ、前述のように、島木健作もやがて転向し、国策文学を書くことになる。また、八木義徳は横光利一の弟子だが、コミュニズムに染まり、やがて転向していく。前述の久保栄も社会主義の運動に入ってくる。

２つの系譜（１）

・社会派：有島武郎－小林多喜二－島木健作－本庄陸男(むつお)－亀井勝一郎

・抒情派：国木田独歩－石川啄木－遠藤勝一（「林檎の花」）

２つの系譜（２）

・宗教派（プロテスタント）：有島武郎－島木健作

・ロシア派（コミュニズム）：小林多喜二－島木健作－八木義徳

このように計四つの系譜に分かれるが、これが北海道文学の常套である。

（２）伊藤整の位置

①　４つの系譜に属さない伊藤整

ところが、伊藤整は先の四つの分類には属していない、面倒なひとである。戦時下に書かれた『得能五郎の生活と意見』『得能物語』、戦後の傑作『鳴海仙吉』を見ると、３作とも戯作的、自己韜晦（とうかい）的でひとを食ったような、批判精神に充ちた、細かいことにこだわった、「意見」を言う作品である。「意見」を言う作品というのは滅多になくて、有名な『吾輩は猫である』は猫の意見が出るが、伊藤整の『得能五郎の生活と意見』の少し前に書かれた中野重治の『村の家』では父親が意見を言っている。

そういうことがまかり通るので、北海道の風土的な色合いが消えてしまって、かけ離れた意見の世界、抽象的な場で作品が作られている。

こういう作風は、安部公房、井上靖などにも繋がっていく。安部公房の作品の中には満州を舞台にした作品がある。井上靖は西域を舞台とした作品を書いている。つまり、北海道の風土から飛び出てしまうひとたちである。伊藤整はそれを小説の中でやってしまう。安部公房も前衛的な作品を書くので、そういう面では似ている。

②　「日本文学」と異なる北海道文学

このように、北海道文学は「日本文学」とは幾分異なった、内地のひとにとってはエキゾチックな、異国風な作品が見られるので、折を見て一読してほしい。もちろんアイヌのひと

たちの作品も含んでいる。アイヌのひとたちの作品はとても重要で、新谷行の書いた『アイヌ民族抵抗史』という本は傑作なので、是非読んでいただきたい。

先ほど、北海道には独特の文学風土があると述べたが、私が高校生だった頃、今はもう無くなった立風書房という出版社から『北海道文学全集』という、明治から始まって 24 巻もある本が出された。この中の第 11 巻が『アイヌ民族の魂』で、鶴田知也の芥川賞受賞作『コシャマイン記』、違星北斗の『コタン』、それから鳩沢佐美夫の『対談アイヌ』はとても良い作品である。あるいはバチェラー八重子など、アイヌ民族と日本人でアイヌのことを書いたひとたちの作品集が入っている。私は個人的に、早世した違星北斗を非常に優れた歌人だと思っているので、是非、古本屋で見つけたら、求めていただけると嬉しい。

③　伊藤整の作品

伊藤整の作品を紹介すると、初期の『街と村』は小樽と自分が育った塩谷村を舞台とした作品であり、戦時下の『得能五郎の生活と意見』、戦後の『鳴海仙吉』と、『若い詩人の肖像』は伊藤整の自伝的作品である。そして、晩年の名作『変容』、これに『氾濫』も含めて薦めたい。今はなかなか純文学の作品が読めないが、そういうものに触れていただくと有難い。

Ⅲ　「私小説」への問いかけ

（1）身辺のことを記述する作品

①　生活報告的性格

次は「私小説」の問題である。これは伊藤整の日本の文学に対する文学観だが、彼は日本の文学の系譜を、日記、随筆、旅行記が中心と見ている。つまり、身辺のことを記述する作品が主流を占めるというのが、伊藤整の根本である。したがって、身辺のことを書くので、それを小説として言い変えると「私小説」という言葉になってしまう。その流れを汲み、自己の自虐的告白、生活報告的性格を持つ作品が現れることになる。

どうしてこのような作品が出てくるのか。小説が生活の報告であればおかしな話である。また、自虐的告白と言っているが、これは日本にキリスト教がなかったことが要因と言える。キリスト教には「告解」という言葉があるが、これは懺悔である。しかし、最終的に日本の風土にはキリスト教が根付かず、「告解」つまり懺悔がなかったので、それを小説中でやってしまったわけであり、それが「私小説」の流れの中にあるという指摘である。

つまり、真実を暴露しても世間への責任を気にしなかったということで、これで一躍有名になったのが田山花袋の『蒲団』である。彼は女弟子の使っていた夜着の匂いを嗅いで、それを小説にしてしまった。花袋は文学的な真実を書いたわけだが、書かれた相手の女性の迷惑は全く考えていない。こういうことがどうして成り立ったのか。もし明治時代に、それぞれが責任を持って行動する、きちんとした市民社会ができていたら、このようなことはできない。近代的な、本当の意味での市民社会が成熟していたら、田山花袋はこういうことは書

けない。なぜなら、自分が大変な責任を負うことになるからである。しかし、日本の場合は、そうならなかった。

つまり、日本の私小説作家は、貧困・愛欲・現世離脱による純化と俗人である自己との戦いを書いたことになる。貧困・愛欲を書いた作家で 1 名挙げよと言われたら、皆さんは誰を挙げるだろうか。岩野泡鳴か、徳田秋声か、島崎藤村だろうか。彼等に比べて忘れられがちな作家として、近松秋江という作家がいる。彼は 60 代過ぎまで生きたが、最期は栄養失調による病死だった。そういう彼の文学は、すべて情痴、愛欲の文学である。

それから、プロレタリア文学の作家、これは労働者・無産階級者であり、日本の治安維持法ができたことでもわかるように、成功の見込みのない革命運動・検挙・拷問、小林多喜二がそうだったが、さらに裏切り、転向を繰り返すという作品である。裏切りと聞いて思い浮かぶのは、評論家の平野謙である。聞くと驚くかもしれないが、彼は裏切りの果て、『近代文学』の同人になるが、それまでの人生はとんでもないものである。これは江藤淳の『昭和の文人』という評論集の中で、すべて暴かれている。「評論はここまでやっていいのか」と思うほど、平野謙が徹底的に皮を剥がされている。

平野謙は転向したが、その後、大日本帝国の情報局の嘱託になる。情報局とは検閲などをしたところである。それが敗戦後には、民主的な『近代文学』の同人になるわけで、2 回転向したことになる。平野謙はもう亡くなっているので、こういうところで名前を挙げるのは失礼かもしれないが、そういう政治的な意味で、このひとはあまり良いと言えない。本多秋五も同様である。

② 文壇ギルド内のみで成り立つ

マルクス主義のプロレタリア文学も、自然主義の作品も、「生活報告書」であり、いずれも同じ水準の作品を書いたが、テーマは芸術性、つまり文学性よりも、むしろ切実な人生そのものに発していた。そのため、読み手も「文学とはそうした種類のもの」として読んだのである。

もちろん、両者とも「文壇」の中での出来事であり、そこでのみ成り立つ作品となっていた。そこで伊藤整は、晩年、日本の近代を問うべく、近代文学に立ち還って『日本文壇史』という作品を書いた。北海道のひとの生き方の一つの典型である。亀井勝一郎は『日本人の精神史研究』で古代からの研究を書いたが、2 人とも未完のまま亡くなっている。

・日本の私小説作家：貧困・愛欲・現世離脱による純化と俗人である自己との戦い
・プロレタリア文学の作家（労働者・無産階級者）：成功の見込みのない革命運動・検挙・拷問・裏切り・転向を繰り返す生活

このように「文壇」という閉鎖社会の中での出来事で、そこでのみ作品が成り立ったわけである。

ここに、広津和郎の著名な「散文芸術の精神について」という文章が意味を持つ。それは「どんな事があってもめげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観せず、楽観もせず、生き通していく精神」という文章で、広津和郎は似たようなタイトルの文章を、戦後、大正期から 3 回書いている。私はこれまでこの文章を何度読んでも意味がわからなかった。しかし、今回やっとわかった。要は、文壇ギルドの閉鎖社会の中で「生活報告」を書くことが小説であって、それを売って暮らしているひとたちに向けた言葉だと読めばわかるのである。

実社会でも通用しそうな文章だが、何回読んでも実社会では違和感がある。そこで、これを「文壇」の中で考えると、ここで言う「精神」は文壇ギルド内での精神を指すと読める。それは文壇ギルドの中で純化され、言ってみれば「生活『道』」の域に入っている。きわめて「求道的」で、実社会への配慮は要らない。つまり、ある一定の塊ができて、その中でめげずに、楽観的でなく、悲観もせず、生きていこうと述べていることが、やっと理解できたのである。間違った解釈かもしれないが、伊藤整はその後に上述の「生活『道』」と書いている。伊藤整に『求道者と認識者』という優れた評論があるが、これは「求道者」の方である。

俗世を放棄して、俗世との戦いも和平もない文壇という矮小な世界に逃げ込み、その中に閉籠もって、文壇内での対立や和平に甘んじているという、ギルドの社会である。

伊藤整はここに目を付け、こういう俗世との戦いも和平もなく、文壇に逃げて来て暮らしている作家たちの仲間を「逃亡奴隷」と名づけている。

（2）西欧の近代社会で生まれる立方体の作品との差異

西欧の近代社会は、自由主義の下、マルクス主義をも受容できるくらい成熟していた。しかし、日本はそれができずに治安維持法を作ってしまった。もちろん、西欧の国々でもそういう対策はなされるが、一旦引き受けてマルクス主義も受容できるくらいになっていたわけである。資本論もそうである。

そのため、作家たちは当初から俗世間に身を置く「俗人」つまり社会の一員であり、ゴシップ的なことは体裁上、作品化できない。自分も困るし、相手も困る。田山花袋の世界とは違うのである。

俗世から作品の構想を練っていくので、作品の「造型」が必要で、完成作品は 3 次元の「立方体」になる。戦前の日本の「私小説」は平面でよいので「立方体」になり得ない。その「立方体」の中に仮面を被せた自己を潜ませるので、「仮面紳士」と表現されるが、これについても『逃亡奴隷と仮面紳士』という伊藤整の優れた評論がある。

伊藤整の評論家の面を見ると、「と」で A と B を結ぶ。そうすると、動的な要素が消えて、静まったイメージになる。湖のように綺麗な静止状態なので、考えるゆとりができる。まず「逃亡奴隷と仮面紳士」と言われると「何だろう」と思って考える。そして後に、伊藤整はその解答をさり気なく、『逃亡奴隷と仮面紳士』という評論に書いてしまうのである。

（3）「私小説」を書かなかった森鴎外と夏目漱石

そういう中で「私小説」を書かなかった作家たちもいるが、これもなかなか複雑である。森鴎外も夏目漱石も社会的地位のある人物で、生活に不自由はなかった。これは先ほど述べた「貧困」に関わる問題であり、彼らはそうではなかったということである。

鴎外はドイツ文学者で、本職は医者である。医者ということは、自然科学者の目を持っていたことになる。したがって、世の中を自然科学的に見る目で、平面ではなく、分析的に見ることができた。そして、中将の位に当たる軍医総監まで出世した。

漱石は東大教授で英文学者である。後に朝日新聞で新聞連載作家として雇用され、高給取りだったので生活の心配はなかった。ただ、書かなければならなかった。

森鷗外(1862－1922 年)
Public domain,
Wikimedia Commons

夏目漱石(1867－1916年)
Public domain,
Wikimedia Commons

そして、2 人とも立場上、ゴシップは立てられなかった。この 2 人は、余裕派とか俳諧派と言われる。

では、この 2 人の晩年はどうだったのか。

鴎外は、医師仲間のせめぎ合い等の現実世界から、やがて『伊沢蘭軒』等の史伝に生きる道を見出す。これは現実の嫌な世界から身を引いて、史伝の世界、つまり過去の世界へと下って、自分以外の他者のエゴを「どうぞ」と通していくという、一種の「断念」の思いがうかがえる。このようにして、鴎外は、最後は優れた史伝を書き続けた。

漱石は、『三四郎』や『こころ』等、自己の内面を「立方体的」作品に書き上げたひとである。ところが、私が思うに、彼は『夢十夜』という作品と今の自分の間を行ったり来たりしている作家でもある。『夢十夜』は自分を赤裸々に暴いた作品で、読んでいる方は恐ろしくなるが、それを漱石は身をもって体験した作家として「調和」の必要性を説く。それが晩年の有名な「則天去私」を生む。この意味を私は高校時代に国語の先生に聞いたことがあり、先生は「天に則り、私を去る」と教えてくれたが、あまりよくわからなかった。そこで伊藤整の解釈を紹介すると、「自分が運命として与えられた苦しみには忍耐して、自分のエゴをあまり強く主張しないで、他人と調和する」と説明している。

つまり、漱石は「調和」し、鴎外は「断念」したわけである。このようにして、この 2 人はゴシップを書かずに身を引いて、あるいは調和して、文学的生活を全うする。

以上が「私小説」への問いかけである。先ほど、森鴎外は医者で自然科学者の目を持っていると述べたが、では、漱石は何から出発したのかというと、正岡子規の友人なので俳句から出発している。日記、随筆、俳句という観点から、松尾芭蕉や与謝蕪村、小林一茶、良寛

等を考えると、現世放棄のひとと言える。漱石はそこから出発し、英文学の素養や漢詩も書き、やがて違った「立方体」の文学作品を作るようになる。したがって、出発点には現世放棄の発端が見られる。

Ⅳ 「エゴ」の問題

そして、いよいよ伊藤整文学の根幹にある「エゴ」の問題である。伊藤整の文学の本質は「個我（エゴ）」あるいは「自我」への根強い問いかけにある。前述のように、社会主義や共産主義の世が来ても、エゴのなくなることはないから（現に、中国も北朝鮮などの共産主義国も一個人のエゴの発露が国を動かしている）、そうした社会体制には、伊藤整は信を置いていない。

ここからまた違った観点が入ってくるが、エゴは「生命と秩序」の相克・せめぎ合いによって端的に顕れるという。

（1）生命と秩序

伊藤整はこの「生命と秩序」について詳しく書いているが、ここでは簡略化して紹介する。

まず「生命」は、常に秩序を越えようとする。秩序は枷、枠である。抵抗物が現われると生命力（エゴという根源的な力）を発揮する。悪く言えば、エゴイズムだろうか。つまり、秩序という自分を締め付けるものを突破しようとする生命力、これが芸術のエネルギーだと言っている。

では「秩序」とは何かというと、これは枠なので、社会保全のために必要だが、極点まで生命を味わおうとする芸術の衝動は決まってそれに逆らう。つまり、「生命」と「秩序」のせめぎ合いがあってこそ、芸術が誕生するということである。

（2）愛情への飢え

特に諸々の芸術家は己のエゴ（生命、個我）の産物である作品を、同業者や評論家、それに一般のひとたちから認めてほしいと思っている。つまり、愛情に飢えている「愛情乞食」である。私はこの「愛情乞食」という四字熟語を読んだ時に「参った」と思った。まさに私がそうだからである。伊藤整の場合は、ここにもう一つ「名誉」が加わる。褒めてもらって、さらに名誉が欲しいということだが、これはルネサンス期のパトロンが、職人と言われる絵描きや彫刻家に作品を作らせ、上手くできるとパトロンの名誉にもなり、職人の名誉にもなるという、名誉、名声が褒めてもらうことに加えられていくわけである。なかなか面倒なことである。

しかし、皆さんは自分が書いた論文や詩・小説など何でもよいが、褒めてほしいと思うのではないか。私たちは、みな「愛情乞食」なのである。これが「エゴ」の問題である。

Ⅴ　西欧文学文化の受容

次がメインの、伊藤整の西欧文学文化の受容である。三つの視点から紹介する。

（1）江戸時代～幕末・明治以後

一つ目は江戸時代～幕末・明治以後の時代背景である。

江戸時代は「和魂漢才」という、つまり「和魂」は日本人の魂、「漢才」は儒学を言うので、日本人の魂を持って儒学・朱子学を極めるという考え方が支配していた。

しかし、それが幕末・明治以後になると「和魂洋才」になる。「洋」は西洋のことだが、この場合の「洋才」とは何と思うだろうか。「和魂洋才」という言葉を作ったのは松代藩士の佐久間象山であり、「和魂」は「和魂漢才」の「和魂」と同じだが、「洋才」が複雑である。ここで日本人は失敗する。「洋才」だから西洋の思想・文化・愛・社会構造も取り入れられたらよかったのだが、日本人にとって役に立つものだけを取り入れた。それを伊藤整は「功利的」なものと言っている。効率的で功利的な、日本人にとって利用しやすいものだけを取り入れて、社会構造や経済的基盤、愛などの大切な思想的なものは、それだけの基盤がなかったために受け取れなかったのである。

（2）伊藤整の視座

では、伊藤整の客観的な見方はどうだったのか、自身はどう思っていたのだろうか。

「世界の文化的な前線というべき地帯で起こった波が日本に伝わると、それは常に、日本文学と質を異にするものとして反発される。にもかかわらずそれは歪められ、引き戻された形で、やがて移される。日本文学の遅れている実質との照応においてそれ等を取り入れる準備や条件が紹介者自体にも、日本の文壇自体にもないところに起こる悲劇である」。つまり、前述のように、都合のよい「効率的」なものだけを受容して「日本化」したと言っている。紹介者自体もわからないままに取り入れて、半分くらいわかったら「もういい」と日本に移してしまったということだ。

ところが、彼の個人的な意見はどうかというと、小説の中で「私などのように、日本文学のそのときの実質を、つまり自分の創作の立っている現実と伝統の場を理解せずに、ヨーロッパ文学を吸収しようとした」と書いている。つまり、彼もすべてわからなくても、途中までわかったら取り入れてしまったのである。それが、次に紹介する「新心理主義文学」である。

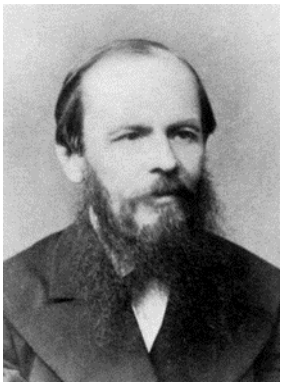
（3）「新心理主義文学」の紹介

もし、伊藤整が「新心理主義文学」をきちんと理解していたら長く続けていたと思うが、彼はすぐに後退してしまう。これについては、なかなか面倒なことが書かれている。「時代をひとつ先行して文学を心理の世界に確立した大家にドストエフスキーとスタンダールとが居る。彼等は確信を以って現実の要素に選択を加えることと、信念に頼ることが出来た結

果、性格上の特殊型を残して大をなした。だが、彼等の仕事といえども、写実精神に於いてはジョイスに一歩譲らなければならず、細微さに於いてはプルウストに及ばないであろう。此処に我々の世紀の文学の驚異があるとともに、信仰に信念を失った我々の世紀（20 世紀）のインテリゲンチアの急所があるのだ」と言っている。

①　ドストエフスキーとスタンダール

ここでなぜドストエフスキーとスタンダールを出して、確信を以って性格上、特殊な形を残したと言ったのか。



ドストエフスキー
（1821－1881 年）
H.Дocc,Public domain,
Wikimedia Commons

ドストエフスキーは『罪と罰』が有名で、『カラマーゾフの兄弟』等、いろいろな作品があるが、彼の文学を読むと、1 人の人間の中で善と悪が往ったり来たりするような心理描写がなされる。読んでいる方は「凄い」と思うが、すべて往ったり来たりして、解決がつかなければ信仰に入る。

スタンダールはどうだったのか。当時のフランスは、ロシア同様、まだ市民社会として未成熟だった。スタンダールはいろいろな解釈があって難しいが、代表作は『赤と黒』で、主人公はジュリアン・ソレルである。後の解釈では『赤と黒』は階級闘争を描いた作品と言われ、「階級闘争」はやがて流行り言葉になるが、そういう意味で、性格上の特殊型を残したとか、あるいは、あれは当時のフランスの修道院の内幕を書いた暴露小説ではないかという意見もあり、なかなか面倒なひとである。スタンダールはほぼイタリアで暮らしていたので、私は親近感を持つが、よくわからない。

スタンダール（1783－1842 年）/オロフ・ヨハン・セーデルマルク画
Public domain,
Wikimedia Commons

次に「写実精神に於いてはジョイスに一歩譲らなければならず」と書いているが、これは伊藤整が翻訳しているので、そうだと思うものの、「微細さに於いてはプルウストに及ばない」と書いてあるのは、伊藤整がフランス語を読めたとは思えないので、伊藤整には悪いが、誰かの訳を引用したものだと思う。ジョイスを翻訳して、プルウストまで翻訳したら常人ではない。私はフォークナーという作家が好きだが、フォークナーはジョイスとプルウストを掛け合わせたような作家で、彼のイタリック体で書かれた部分は聖書を読んでいるようで見事である。

②　信仰の信念を失った世紀

そして「此処に我々の世紀の文学の驚異があるとともに、信仰に信念を失った我々の世紀のインテリゲンチアの急所がある」と書かれている。つまり、ドストエフスキーでもスタン

ダールでも信仰の世界はあったが、20 世紀初めのインテリゲンチアには信仰によって救われることはなくなったと、伊藤整は言っているのである。

これは伊藤整の意見であり、皆さんはどうなのかわからないが、信仰をこのように使って「信仰に信念を失った我々」と書いている。ドストエフスキーやスタンダールの世界から、一歩こちら側に進んだ世界ということだが、このように書かれると私もよくわからない。

Ⅵ 「性・愛」の表現の変化

D.H.ロレンスの作品に関わる「性と愛」は伊藤整文学のもう一つの核である。これも翻訳に依るが、当時の日本人の文化的な背景が翻訳に依ったということを承知して欲しい。彼は『ユリシーズ』によって新心理主義文学に、D.H.ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』の翻訳によって「性と愛」の方に向かって行く。

そこで、伊藤整が 40 歳半ばに書いた『鳴海仙吉』と 60 歳過ぎて晩年に書いた『変容』という作品で「性・愛」がどのように表現的な変化を遂げているかを見ていく。

（1） 『鳴海仙吉』と『変容』における表現

『鳴海仙吉』では、「女は、ああいう顔と肉体を持って、そしてつまり、柔らかい粘膜の開いた肉体を持って居るから、だから愛などという曖昧な考え方が起きて来て、そこまで来ると問題の終末に来たような錯覚が起こるのではないか……その（女の愛）本体は貪欲な必死の執念で、そして……やさしい愛撫だとか、白い腹や股だとか、それから決定的には自分の秘密の内の粘膜の裂け目の陶酔の予感とそれへの恥じらいなどに蔽われまぎらされて居るだけのものではないか」という一文があるが、これが 40 代の『チャタレイ夫人の恋人』を訳した頃の伊藤整の表現である。

それから 10 数年の年月が経ち、『変容』が書かれる。これは伊藤整の最後の作品である。これとその前の前に書いた『氾濫』が評価されて、伊藤整は 1970 年のノーベル文学賞の候補になっている。

これは良い作品である。しかし、これから読むのは会話で、このような内容を会話できるのかと思うところもある。「愛というのは、執着という醜いものにつけた仮の、美しい嘘の呼び名かと、私はよく思います。……生きることの意味をさぐり味わっている人間は、その性においてもその反響を全人間的に受け取っている。生きる意味の把握があるところだけ性の感動の把握もあるのではないか……」という、これはある老いた画家が女性に語る言葉である。

（2）２作品における表現の変化

40 代半ばに書かれた『鳴海仙吉』と 60 代過ぎて書かれた『変容』の二つの表現の変

化はどうだろうか。こう言うと伊藤整は怒るかもしれないが、『変容』の方が説明的になっているのがわかると思う。小説とは何かを考えると、表現は説明ではなく、描写でなければならない。その点で『変容』はとても描写とは思えない。一方、『鳴海仙吉』は説明ではない。

どちらが良いかは、私にはわからない。ひとには好みがあり、それぞれの文学観があるので、『変容』は非常に高く評価されているし、戦後文学の中で一つ挙げよと言われたら『変容』を挙げるひとがまだいる。したがって、いろいろと分からないことがあるが、このように表現の上でも伊藤整は変化している。

この頃になると、新心理主義文学などは放置されている。伊藤整は『新心理主義文学』という評論を書いて、すぐに 10 数本の作品を書いているが、すべて三角関係の短編で、それから別の作風に変わっていく。著名な作品で言うと『生物祭』は吉本隆明から高く評価された。伊藤整が東京工業大学で教えていた時に、吉本隆明は大学院におり、だから褒めたというわけではないが、『生物祭』も非常に優れた短編作品である。

最後に、エピソードを一つ紹介する。戦艦大和の最後の艦長の名を知っているだろうか。伊藤整一と言う中将で、艦長室でピストル自殺を遂げ、死後に大将に格上げされた。伊藤整と名前がよく似ているので、伊藤整と伊藤整一の間で郵便の誤配が多かったそうで、そこから互いに親交を結んでいる。この面白いエピソードは、伊藤整の戦時下の日記に出てくる。

以上で、本日の私の話を終わりたいと思う。

質疑応答

Q1　北海道を「植民地」と認識すると、伊藤整の立場は加害者か、被害者か
Q2　新心理主義に対して、旧心理主義はあったのか
Q3　生命と秩序の調和に必要なのは「笑い」と「霊性」ではないか
Q4　日本は「個人」の概念そのものを受け入れなかったのではないか
Q5　文壇ギルドから個人の自立は期待できるのか、メインの考え方は何か
Q6　晩年の伊藤整は読者をどのように認識していたのか
＜補足説明＞
Q7　ノーベル文学賞候補として、伊藤整のどこが評価されたのか
Q8　精神領域で文明開化できなかったという問題に、伊藤整はどう立ち向かったのか
Q9　近代社会の成熟に向けたヨーロッパの関心と、日本との違いは何か

Q1　北海道を「植民地」と認識すると、伊藤整の立場は加害者か、被害者か

北海道を「植民地」と意識すると、そこに加害者意識、被害者意識があると思われる。伊藤整はどちらの立場だったのか。

（澤井）

伊藤整が加害者か、被害者かという前に、アイヌ民族に対して和人が加害者だったという時代の流れがある。1400 年代にコシャマインの乱、1600 年代にシャクシャインの乱というアイヌ民族と和人との戦いがあり、松前藩がアイヌ民族を支配下に治めてしまう。

したがって、伊藤整の時代はそういうことを経た後の時代であり、ようやく数年前からアイヌ民族についての権利意識の回復等の問題が起きている。先日、ある芸人が「あ、イヌだ」という発言をしたが、今頃そういうことを言ってはいけない。あるひとに聞くと、60 年前からそういう発言があったそうである。

つまり、伊藤整は和人＝日本人だが、その前に、北海道には加害されるアイヌのひとたちがいたことをまず抑えなければ、誰が加害者で、加害される意識かという問題は解けないので、是非、先ほど私が紹介した北海道のアイヌ民族の文学を読んでいただきたい。講談社文芸文庫から川村湊氏が『現代アイヌ文学作品選』という本を編纂して出しているので、それ等を読んで、北海道という地域、蝦夷地の歴史を知っていただきたい。

そこに開拓使が入って来て、札幌というまちを都市に決めて開拓が始まるわけである。そこに移住してきたひとたちの、ある藩の話を書いたのが本庄陸男の『石狩川』という大作である。これも是非読んでいただきたい。

Q2　新心理主義に対して、旧心理主義はあったのか

新心理主義があるなら、旧心理主義もあったのか。あるとすればその違いは何か。

（澤井）

私の専門はイタリア文学なので、フランスのことはあまり詳しくないが、新旧の心理主義について、フランスの小説の中に『アドルフ』という作品がある。私は高校時代にこれを読んだが、きめ細やかに心理を描いた作品である。この系譜に「私」というものを描くジッドやゾラや、少し前になるがルソーの流れがある。

伊藤整の紹介したものに「新」が付いているのは、「旧」に対する「新」ではなく、昭和初期は「新感覚派」とか「新心理主義」等、「新」という言葉が流行ったということである。そういう意味で、申し訳ないが、「旧心理主義」というものは、私にはわからない。

Q3　生命と秩序の調和に必要なのは「笑い」と「霊性」ではないか

伊藤整の文学論に関連して、生命と秩序の二律背反において調和をとって生きる術として「笑い」があるのではないか。そして第 4 の要素があるとすれば「霊性」ではないか。「笑い」と「幻想」が現世を相対化する二つの方法であると思うが、どうか。

（澤井）

伊藤整は『小説の方法』の後に『文学入門』、その後『小説の認識』という本を出す。その中に、芸による本質移転論があるが、伊藤整はダンテとボッカッチョを詳しく論じていて、中世のキリスト教に縛られたダンテの生き方を笑い飛ばしたのがボッカッチョだと言っている。笑い飛ばすというのはコメディの一種で、「芸」なので、その芸で今までの世界を、それが何であれ笑い飛ばすことはできる。

コメディについては、ダンテの『神曲』という作品にそのタイトルを付けたのは森鴎外だが、アンデルセンの『即興詩人』を翻訳した時、その中に「La Divina Commedia」という作品が出てきて、森鴎外は『神曲』と翻訳してしまった。「La Divina Commedia」は「神聖喜劇」を意味する。喜劇とは大団円で終わるもので、それが崩れると悲劇になる。大団円で終わるからハッピーエンドであり、ダンテは天国で神に会うので「見神」と言っている。それを「そんな古いものはもうだめだ。形骸化している」と言って笑い飛ばしたのが、ボッカッチョの『デカメロン』である。それについて、伊藤整は笑い飛ばすことを「芸による認識」と言っている。

「霊性」については、予定調和の領域だと考えるが、この文脈では無理だと思う。イエズス会のイグナティウス・ロヨラが作った本は『霊操』で、これとも絡んで一概に答えられない。私はその辺りの研究をしているので、申し訳ないが、滅多なことは言えないし、言う自信もない。

Q4　日本は「個人」の概念そのものを受け入れなかったのではないか

西欧から日本が受け入れなかったものは、社会制度、思想体系、宗教なのか、あるいは個人という概念そのものだったのではないか。今の病理現象も含めて伺いたい。

（澤井）

「個人」という言葉は、明治になって中村正直が明六社の中で作った。「社会」は福澤諭吉が作った言葉で、自由論の中の「社会」の対立語として「個」が出てくるが、日本は、未だに「個人」つまり individual を確立していない。

例えば、先日、和歌山県で起きたヒ素事件の犯人の長女が、娘を抱いて自殺した。あの一家は皆に虐められたが、子どもたちには責任はない。責任があるのは、死刑が確定した中で、まだ無罪を主張して係争中の本人だけである。このように、日本の悪いところは「個」を確立できていないことである。

他にも、ある有名人の息子が罪を犯したとすると、その父親である有名人が謝罪する。これはアメリカでは考えられない。アメリカの場合、その父親や母親に各地から激励の手紙が来ると言われる。ところが、日本はメディアが責め立てる。つまり、本人が自己責任を捉えるのではなく、家族が捉えて謝罪するのである。したがって、「個」が確立されていないのは、私も同意する。

個人主義が確立されていないので、「privacy」という単語を辞書で引くと「プライバシー」と書かれていて、その説明が書いてある。つまり、「privacy」も「private」も日本には相当する単語がない。

したがって、ご指摘のとおり、宗教も中途半端に受け入れたし、社会構造は受け入れてもあまり上手くいっていないが、最もよくないのは「個」たる存在の意義を受け入れられなかったことである。例えば、私の娘が何か罪を犯したら、私は謝らない。一個の人格が罪を犯すのであるから、私は一切何も言わない。その時に「お父さんは何を思っているのか」と聞いてくるメディアの方がおかしいと思う。そういう意味では、日本は生き難い。

昨年、未来社から私の大学の後輩で TBS のディレクターである齋藤雅俊が『自己責任という暴力』という本を出したが、とてもよいので読んでほしい。例えば、タレントのみのもんたの息子が罪を犯した時に、みのもんたが謝って放送界からはずされてしまったということが起きたが、これはおかしいという論理の立て方で話が進んでいく。是非、読んでいただきたい。

Q5　文壇ギルドから個人の自立は期待できるのか、メインの考え方は何か

文壇のギルド化は蛸壺文化そのもので、そういうところから個人の自立は期待できないのではないか。また、文壇ギルドで内面を求める文学技術が追求されたのか。文壇のメインの考え方はどこにあったのか。

（澤井）

文壇が今あるかどうかわからないが、主流は東大・早稲田・慶応出身者で、一橋大学を出た伊藤整は傍流だった。傍流のひとは主流に憧れるので、伊藤整にとって、主流の人間が作っているものは文壇に見えた。したがって、伊藤整ほど文壇にこだわったひとはいないし、そこから彼は『日本文壇史』を書いている。これは縦割りの文壇ではなく、伊藤整が生まれた 1905 年に漱石の『吾輩は猫である』が出て、1 年後に『坊っちゃん』が出る等、縦横に

尽くした本である。

日本は、自然主義の作家たちの前にリアリズムを受け入れるが、日本が受け取ったリアリズムは「生活をいかに生きていくか」というものであり、文学的な方法論としてのリアリズムは受け取れなかった。それだけ「生活をいかに生きていくか」という方に重きがあって、そこから「私はこういう風に生きた」という、ある意味で自虐的な文学作品になっていく。

ところが、伊藤整の作品はユーモアがあるので、自虐的にならずに済んでいる。ユーモアがあるということは、ある程度の空間や距離があって笑っているわけであり、前述の「笑い飛ばす」と同じである。伊藤整の作品が戯作的というのは、そういう劇中劇のような作品を書くからであり、「ひとを食ったような話」とは「こんなものでいいのか」と笑っているのである。もちろん、実生活の人物は挙げないが、小林秀雄やいろいろなひとたちに対して「あいつらは酒を飲むと怖いが、素面の時は何もできない」とまで言っている。そういうことを平気で書くひとなのである。

伊藤整の『得能五郎の生活と意見』の中に、志賀直哉の一番弟子である瀧井孝作が出てくる。「この頃、得能君はいろんなことを言うけれども、文学というものは正義を書くことであって、自分の書いた言葉は正しいと信じなければならない」とある会で発言するが、伊藤整はそれを全部写し取っている。モジリで書いてはいるが、あの『無限抱擁』を書いた瀧井孝作だとすぐ分かる。つまり、文学を書くことは正義である自分を表現することだという一派が、志賀直哉の系列として出来上がっていくわけである。志賀直哉は大きな影響力を持ったひとで、小林多喜二も奈良に志賀直哉を訪ねて、円満に帰って来るが、あのひとは自分が正しいと思って正義を書くことを旨とした作家である。

もう一つ、志賀直哉は的確な描写ができたひとであり、いろいろな派があって、白樺派にもいろいろなひとがいるが、志賀直哉は小説の神様と言われて一番影響力を持ったひとだった。しかし、伊藤整は一歩引いて、一番弟子の瀧井孝作を何も非難しないで、瀧井孝作が発言したことを『得能五郎の生活と意見』の中で書いたのである。驚きと共に、そうかとも思う。

Q6　晩年の伊藤整は読者をどのように認識していたのか

1960 年代後半、世界の文学理論の流れは、作家と作品と読者を独立して考え、読者が作品を読んで初めて作品は完成するという考え方だったが、その中で晩年にあった伊藤整は読者をどのように認識していたのか。西欧の流れに敏感なひとだったので、そういう萌芽についても何か感知していたのか、どのような形で考えていたのか。

（澤井）

当時、伊藤整は国際ペンクラブ学会にも出席し、アメリカの大学で教えてもいたので、ご指摘のとおりのことを伊藤整は意識していたと思う。彼はロシアにも行ったことがあって、ロシアの文芸評論家に「あなたは何を書いているのか」と聞かれ、「私は、資本主義内で生きる人間のあり様を書いている」と答えている。伊藤整は政治的にはリベラルだったが、自

国の体制をきちんと認識しており、そうした社会構造の中で生きていく人間の一つの生のあり方を書いて、読者との距離をきちんと保っていたと思う。

『変容』や『氾濫』という作品を読むと、特に『氾濫』は化学者が主人公だが、東工大の先生だったので東工大で取材をして主人公を作っている。したがって、本格小説というのは、日本の場合は仮の主人公を作って、それに魂を入れていくという発想もあるが、伊藤整はそうではなくて、きちんとした仮託の人物を作り、その中に自分のある思想を埋め込んで書いていった作家だと思う。

また、1960 年代後半の世界の潮流は、読者は作品と独立しているという認識だったと思う。伊藤整は安部公房を高く評価しており、そういう認識がなければ、安部公房を評価できない。『箱男』の箱の後ろに書いたのは伊藤整だけだったと思うので、そういう面では、きちんと読んで評価していたと思う。

＜補足説明＞

伊藤整は、日本文学の中で主流を目指したが、なれなかったひとである。やはり、評論家と言えば小林秀雄で、その小林秀雄に伊藤整は初期の作品を酷く叩かれた。評価したのは川端康成であり、伊藤整の葬儀の時の葬儀委員長は川端康成だった。

そういうこともあって、私小説について小林秀雄も、伊藤整も発言している。両方に共通するのは、「社会的な私」をつくっていかなければならないということである。小林秀雄はジッドの作品を挙げて「ジッドは私を分析している」と言い、伊藤整はそれを受けて「でも、日本の作家は分析に足らず、生活報告である」と二つを繋ぎ合わせて論を作っている。両方同じことを言っているのである。

そういう意味で、「私」というのは今でも問題で、それを解決できなければ、日本の文学は世界と一緒に歩むことが難しいのではないかと思っている。1970 年に伊藤整がノーベル文学賞の候補に挙がったのは、『氾濫』と『変容』という作品を高く評価した、芹沢光治良という当時の日本ペンクラブ学会の会長の推薦によるものだった。その時、芹沢氏は石川達三も推したが、如何せん石川達三は世界では知られていなかった。伊藤整は海外に出て国際ペンクラブにも知られており、伊藤整の方が有名だったわけである。

ところが、その年に伊藤整は亡くなってしまった。その 2 年前に川端康成がノーベル文学賞を受賞したので、こういう話は嫌だが、まず政治的に受賞は無理だった。もう少し長生きしていたら何かがあったかもしれないが、それでも、ノーベル文学賞に推されるほど『氾濫』と『変容』は優れた作品である。

Q7　ノーベル文学賞候補として、伊藤整のどこが評価されたのか

1970 年のノーベル文学賞候補に芹沢氏が推薦した眼目は何か。作品としては『氾濫』や『変容』を挙げられているが、世界水準の文学論から見て、伊藤整のどこが評価の対象になり得ると判断されたのか。

（澤井）

芹沢氏の作品を見る目が、『氾濫』と『変容』をノーベル文学賞の水準にあると見なしたのだと思う。推薦できるのは 1 人だけなので、芹沢光治良というフランス文学に堪能なひとが、英文学の伊藤整を推薦したのは面白い話だが、映画にもなった『氾濫』、そして『変容』を読むと推薦された理由が分かる。それしか言えない。

Q8　精神領域で文明開化できなかったという問題に、伊藤整はどう立ち向かったのか

明治維新で日本は文明開化を成し遂げ、欧米に立ち向かうことができたが、技術領域に偏重していて、精神領域においては文明開化を成し遂げることができなかったと認識されているようで、先生のお話の中でもそのような認識があったように推察した。現代にもそういう問題があるとすれば、伊藤整はそれに作品でどのように立ち向かったのか、あるいは現在、我々がそのような問題を背負っているとすれば、どのように解決すればよいのか。

（澤井）

私はルネサンス末期を研究しているが、末期は「自然魔術師」の一群が南イタリアから出てくる。これは「自然は生きている」という考えの下で、例えば、花を見た時に、花びらの色、触感、匂い等を重んずるひとたちであり、自然哲学者と言われる。

ところが、そのひとたちと重なるように、イタリアではガリレイが登場する。ガリレイの言葉に「自然という書物は数学の言葉で書かれている」という有名な言葉があるが、ガリレイは、自然が数式で表されると考え、花の匂いや触感ではなく、枝が何本あるか、めしべとおしべが何本あるかということに関心があった。したがって、自然哲学ではなく、科学哲学の分野に入ってくる。

そして、その間に魔女狩りと科学革命が同時進行する。ここが大事なのだが、イタリアはルネサンスを最初に成し遂げた国で、商業立国だったので、財力があり、魔女狩りはあまり行われなかった。ところが、アルプスの北のフランス、ドイツ、スペインは遅れて発達したので、貨幣経済が入り込んだ段階で貧富の差ができてしまい、ガス抜きが必要になった。そのために、魔女をでっちあげて焼き殺していったのである。

つまり、科学革命が起きたイタリアを見ると、ガリレイの「自然という書物は数学の言葉で書かれている」という言葉のように、自然を「量」と見る。これは科学哲学である。ところが、それと重なるようにイタリアで起こり、やがて潰れていく自然哲学は「自然は生きている」と見るので、自然の中に霊魂を見て、その霊魂を大切にしてオカルトの分野になる。オカルトは「隠微な哲学」を意味する。イタリア語の「隠す」の派生語である「隠された」＝occulto が英語のオカルトになる。つまり、夜の世界である。昼の世界はガリレイたちが作っていく。それで、自然哲学のひとたちは自然を「質」と見なし、ガリレイ以降のひとたちは「量」と見なすが、この「量」の世界で私たちは繁栄し、その中で「自然は生きている」という思想がなくなってしまったのである。これは取り戻さなければならない。これを「環境破壊と同じか」と訊くひとがいるが、それは違う。それは現代の問題で、当時の問題では

ない。

そのように自然哲学から科学哲学に移行する時に、科学革命と魔女狩りが同時進行したわけだが、現代で考えると、コロナの暗の部分と AI の明の部分が同時進行している。つまり、1550 年～1640 年の間に魔女狩りと科学革命が同時進行したように、今、同じことが起こっている。今がターニングポイントであり、両方に目配りよく、今を生きなければならない。私はアナログ派で、別にそれを悔いたりしていないが、複眼を持ってほしいと思う。

Q9　近代社会の成熟に向けたヨーロッパの関心と、日本との違いは何か

近代社会がなかなか成熟しない中で西欧文化を取り入れたところに、日本の社会の悲劇があったと思うが、では近代社会の成熟とはどういうことなのか。個の確立等もあると思うが、西欧には西欧なりの社会の病理があり、人間疎外や自己アイデンティティ喪失による深刻な悩み等、社会が病んでいる中で、そういうことのないところで突破していこうと、夜の世界やイタリアルネサンス等へ関心が寄せられているように聞く。その点で、ヨーロッパの関心の向け方と、日本での関心の向け方にはどのような違いがあるのか、あるいは注意しておかなければならない、考えておかなければならないことがあるか。

（澤井）

例を挙げると、フランスでゾラやバルザックによって自然主義が成立するが、この自然主義の「自然」とは現実の生活を意味する。そして、その自然主義には「実験小説論」というものがあり、自然である現実世界を事細かに分析し、環境まで考えて、そこから小説を作っていく。つまり、人間を全体的に捉えて小説を作っていくことが、ゾラの『居酒屋』や『ナナ』等の作品が入った『ルーゴン・マッカール叢書』全 20 巻の中で語られる。この場合の「自然」に対立するものは、一神教の「神」である。「自然」は現実生活なので、「神」とは違う。

したがって、「神」と対等に対立するものを持ったヨーロッパ諸国と、「神」を信仰で移入した日本の場合は、何かと対立する「神」ではなかった。一神教の「神」を受け入れても、日本で根付いているかどうか分からない、カトリックやプロテスタントの人口は仏教徒に比べて少ないはずである。つまり、一神教の「神」は多神教的な日本には受け入れられない。

ここが違うので、「神」に向かって「個」を確立していく、アメリカのようなカルバン派の社会と、日本のようなそういう厳しさのない社会では、全くその後の発展、その他「個人」という問題が異なってくる。自然主義を日本は自然主義として受け入れたが、それは生活報告になってしまった。神がいないから対立するものもないし、自分の生活と愛欲、貧困、そういうものについて、キリスト教における懺悔を小説で行ってしまったわけであり、そういうところに「個」としての発展は無理だったと思う。

前述の自然哲学は多神教であり、錬金術も多神教である。錬金術は東方世界から西方世界に入って来るが、その錬金術の中に入っている神は皆同じである。ところが、日本の八百万の神は全部違う。ヨーロッパはたとえ多神教でも神は一つであり、それがいろいろなところ

に宿る。新プラトン主義も「一者」から流出して「一者」に戻る円環の思想である。日本は大日如来の思想があるが、あれは還元することはない。そのように「神」の存在は大きい。

さらに踏み込むと、西欧の文化はヘレニズム文化からヘブライズムが入り込んで来て、やがてルネサンスでヘレニズム文化の異教がヘブライズム文化の上に一世を風靡する。しかし、皆キリスト教徒として死んでいく。この辺りは、イタリアを含む地中海の環境とアルプス以北の環境は異なるので、ヨーロッパを一つと見てはいけない。アルプスを境にして二つに分かれ、民俗的にもラテン民族、ゲルマン民族、スラヴ民族と分かれているので、その点は十分に気を付けて考えなければならないと思う。

発 行 日	2023 年 11 月 30 日
講演著者	澤井　繁男
編集発行	公益財団法人　国際高等研究所
	<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局
編集協力	アトリエ アロ　大仲佐代子

ISSN 2759-0577

満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像
（国際高等研究所庭園）